

「日本語がお上手どすなあ。ほんまに日本人と変わりおまへん」

京都三条河原町の宿の女が、二人を玄関口から送り出しながら言いました。

「わしより上手いぐらいじゃろうが。ベトナム人なのにな」

山田が大将髭を撫でながら言いました。

「世話になった。こちらさんはもう一泊だ。後のことはよろしく頼むよ。何と言っても外国人だからな」

宿の女にそう言いつつ、四郎とは別の人力車に乗りました。

「じゃあ、芝さん、明日の夜、神戸で会いましょう」

二人は、人力車でそれぞれ反対の方向へと別れていきました。

四郎を乗せた人力車は、すぐに鴨川にかかる三条大

橋を渡っていきます。

一九三一年九月、京都は未だ盛夏の名残をとどめ、鴨川の河原に茂る草木もむせかえるような熱気の中にかすんでいましたが、澄んだ水のせせらぎに散る陽に幾ばくかの秋の気配が感じられました。

それに、南国住人の四郎からすると、ちょうど肌にかい程度でもあり、橋の上から眺める北方の山々の遠景や南に広がる田畑や人家、そして東山に点景となつて続く寺や塔は、四郎の心にやすらぎを与えてくれるものでした。

橋を渡り終えると、河岸に沿った道を四条へと下り、それから東山のほうへと人力車は進んでいきました。

祇園の一角に対して八坂神社がありますが、その前で降ろされた四郎は、車夫の指す方向、円山公園の中へと入っていくゆるやかな坂道を登っていきました。

東山総合病院。校舎のような二階建ての木造建造物が、斜面を生かす形で奥へと続いていました。

四郎の祖父である次郎の兄、澄が創立したという病

院です。幕末の福井藩の医者だった伴井仲庵の長男澄は、京都医学校校長となった後、私立東山総合病院をこの地に建てました。そして、澄が明治三十一年に亡くなった後は、息子の朴が病院を継ぎ、その時に到っていたのです。

澄から見えて弟の孫である四郎が何故はるばるベトナムからやってきたのか、しかし、特別の用事があったというよりは、若年の頃から一度で良いから祖父の故国である日本を訪れてみたいと思っていたということ、それが今、四十五歳にしてやっとかなったというわけなのです。

澄、朴と次郎、三郎、四郎との間には、七十年にわたる途切れ途切れながらの親族同士での交信があったのです。

四郎は先ず横浜に着きました。そこで商売相手の山田に会った後、いっしょに京都に来たのです。明日神戸で再会というのは、明後日には中国の大連行きの船に乗り込まなければならなかったからです。山田や四郎は九月十五日に大連の宿で中国人の呉と落ち合う約

束になっていたので。「満州」(現在の東北地域)での商業的野心に山田は駆られていて、呉もそれに無関心ではありえず、そして四郎も当初は予定していなかった満州行きの旅行に付き合わされるはめになってしまっていたのです。

「私との関係から言うと、どんな具合になっていたのでしたかな、えーと」

病院の院長室で四郎を迎えたのは、その春、病院長になったばかりの研二、つまり朴の次男坊でした。

「私の祖父と貴方の祖父が兄弟だった。父の代、つまり朴と三郎さんとの関係は従兄弟同士ですわいな。その従兄弟同士の子供たちの間柄というのは、何と言いますかいな。又従兄弟言うんでしたか……」

「……………」

「まあ、そんなことはどうでもよろし。そやけど、貴方さまが私より大分齡をとって見えられるのは、祖父の代からいうとあべこべで……私が次男坊だとして」

「ベトナムでは早婚が多くて、うちの親父も早い結婚



だったようです。ですから、私も早く生まれて、早く歳を食うことになります」

「そや、そや、そうですね」

「日本から来た祖父も若くして祖母と結ばれ、ベトナムの芝家に入籍して早々と家族を作ったのです」

「そや、そや、そうですね」

研二はその年三十歳に過ぎません。見たところからして、四十五歳の四郎は早くも白髪まじりの頭なのですが、研二は青年から抜けきらない感じですよ。

「それにしても、こんな若造を院長にして、親父は早々に隠居してしまつたよつて、かなわんですわ」

「お父上の朴さんはお幾つでしたか、確か、六十……」

「六十二です。まあ、隠居しても良い歳ではありませんが、如何せん、後継ぎが三十歳のこんな若造では、どうにもなりません」

「ご長兄は……」

「三十四です。が、医者ではありません。貴方さまのお父上の三郎さんは……」

「五年前に亡くなりました」

上に見えていた丸鈴が鳴ると、脇の通用門が開き、

爺や風の男が首を出しました。

「四郎さんですやろ」

「そうです」

「連絡が来ております。こちらからが、よろしいですよ。それとも大門を開きますか」

などと訊きながらも、もう四郎の荷物を手にして、さつさと通用門のほうへと四郎を導いているのでした。

朴は離れの部屋で絵筆をとって一枚の油絵と対していましたが、現れた四郎を見ると、正座して四郎を迎えました。白髪、細身でやや猫背の老人でした。少々狷介な雰囲気は漂わせていないでもない表情を、それでも一瞬ほころばせて、

「やあ、よういらつしゃいました」

と言いつつ、座布団を指しました。

四郎が朴の真似をして正座をしようとする、

「あぐらでよろし、あぐらでよろし」

と言ひ、自分も胡坐をかいてみせました。

こんな会話を交わした四郎は、しかし、文通していた相手が朴だったこともあり、結局のところ、病院を出て、烏丸御池通りの交差点にある朴の家へと再び人力車を走らせることになりました。福井の藩医だった伴井仲庵の長子つまり朴の父親である澄は、大学校長になつたり、総合病院を建てたりした人間だけあり、それなりの社交性というか社会性を持った男だったよ。うで、京都に構えた自宅も、京都のど真ん中の烏丸御池だったのですが、澄の子の朴はいささか性情を異にしていました。一言で評すれば、孤独を愛する非社交的な男、いや偏屈者とも言われることがある男でした。住居は父の代からのものを使つてはいましたが、手を加えるなどということは一切しませんでしたから、蔵二つもある広い屋敷は、庭も建物もいつしか古色蒼然としてきていたのでした。

大きな木の門の前に立って屋敷を仰いでいた四郎は、門の横に垂れている綱を引き下げました。

ガラン、ガラン……

女中が蓋つきの湯飲み茶碗と和菓子を盆にのせて入つてきて、頭を下げつつ、四郎と朴の前に置いて去りました。

「いつ日本に着かれましたか」

の会話から始まって、旅行の日程などを語りだしてまもなく、妻の君子が現れました。五十を過ぎているのですが、若々しく見えるのは、正装、化粧した姿の故だけではなく、朴とは対照的に社交好きだったからかも知れません。

「まあ、まあ、こんなにむさくるしい場所で、応接間に移られたらよろしがな」

と言いつつ入ってきましたが、四郎に向かって、

「おいでやす」

と言ひ、豊に手をつきました。

「応接間がよろしか？」

と朴が聞くので、四郎はあわてて、

「いえ、ここで結構でございます」

と答えました。

「隠居の身よつてな」